

雙魚書日載

卷十九

大正二年十一月下旬



特別  
イ4  
1919  
268



斐島布日載

大正二年十一月廿五日 起筆



西遊記

東北と九州とを比較し各港のちがひを述べた。九州  
 と早く開きけりといふは、東北と較べしと云ふと文  
 中の句の論じあるは、東北人の自分から初めし  
 出さうけり初見先の所感を述べ云ふ(八自  
 分の初見を述べた)の感あるべき所なりとある  
 こと九州よりも先中し福家と何んともありて九州  
 の首府と云ふことと海軍併し今と云ふことと云  
 と港況を述べた。其のち親接し話しし事あり  
 候ふ事ありし。馬関の長崎とも昔しと云

長崎七町のひらき(あまの山を以つて四宮を因  
り地帯を天下を平らにせむと云ふ其の秘授  
いとその利を大なりと云ふ其の秘授  
と云ふは是れのことなりと云ふは其の秘授  
を終る行つてんは、いんを長崎に教ふん  
バ秘授大と云ふことありと云ふことあり  
ゆきの甲法とて之を合ふと云ふことあり  
九州のひらきを南画の流うとて之を合ふ  
るいふも南画を流うとて之を合ふことあり  
九州に在る南画を流うとて之を合ふことあり  
之樂の人の見るとして浄瑠璃を流うとて之を合ふ  
と云ふことあり九州の山多し但

此場古秘授の大なること

大宰府古廟の古くも其の公納音の地帯  
随うと大安寺といふ寺ありと云ふことあり  
也即ち古部に在る寺といふことあり  
社に在る寺といふことあり其の秘授の流うとて之を合ふ  
古部湖の寺の古くも其の秘授の流うとて之を合ふ  
なり  
九州の千年以前の史蹟を流うとて之を合ふことあり  
あつて人の心とて之を合ふことあり  
感ある遺蹟を流うとて之を合ふことあり  
るうなり  
福島の西南ニある系島郡内、佐土村とい





解し 古の人を千本とし古の文の的を  
かたがたのことく外人の親し文のそを所創  
と思ひや寧ろ之を快日とせば産或くん大果  
の民と世界に確形するをわん  
金とも海の家とじんが味とちあをそあす各  
所を海歴と思くく長崎を構あくしこんよ  
り漸く表徴を見而して文のの関門とし行  
くの遺給の存するもの、よろしく保護を要  
すこんえの潮原の大切なる記念物也今も未  
だ新築とすの道にそんとも古の市街次  
表徴たる遺給の形を存見ことあるべしと  
りとそんも大いに入る誇りなき遺給のま

存するものありし物も古の人を七段に之を  
わくするものありし而して其遺給を如林す  
きるゆゑの案内記する定あらず入るこい  
きるゆゑの中市街の存するもの、ある人を  
えん給のそをわすれしを能きうあるが悲  
しく十層ののそを投てはそああ、向ん  
るる程々の遺給をさすゆに保存し修治  
して是の御するをわん  
長崎をこのまちに後を修るゆに、支竹  
出、このまちにたむかひし上海をむと東  
二列の里絶のよもかうさきまを修治する  
るる一、このまちをくるとそあ地元のそあ







くせりてん二つけつとあるを過ひひを例とせり  
其のゆゆしくいふとゆゆしく  
とつ全体更部とて別母のものをも七海と親  
を元と多くと其の各を不致く出らしとせり  
尚又書字とてを秘る手ゆも書字とてよ  
うし也勿論前送の年毎にうけつたるは  
うけつた運送に付うけつたるは巧又よるを核  
きつるを考とせし其の核きえり各の各ち  
こねるものうけつたるは方と此意味とて  
所商を親とせしとてしむるは海商の所  
と概しと海商ゆとて海商堅守の所  
ゆと海商方とるも之れも核きえりこ

とを法とてししとて系何の考考の各  
る核きえり各の各ちを元結らんとて其の以  
を呼出しし海商と其の各の行状とを  
考しつることをゆとせしとてしむるは  
概言ししとて系何の考考の各  
とて後とてしとて考考の各  
る分位の核きえり各の各ちを元結らんとて其の以  
を呼出しし海商と其の各の行状とを  
考しつることをゆとせしとてしむるは  
概言ししとて系何の考考の各

○長崎の出港とありては東海商船の  
敵害の首を多く其人意欲の凡我に  
る海軍

其子と平河徳重と稱す代々唐の通商  
北巻(前)の二十六年と号し其子五十母(前)と  
あり

○曰者又云大黒川の西北に連なる坂路一帯を西坂  
と名づけ其大村の津浦上り通して西側の榎州  
生茂り置るは時をきく多路を以て幕方の代  
主と北家と死罪地と定む邦宗塚とを意に  
年百天の前後より南塞人六十一人を刑し  
塔海ありしりしとあり時宗の亂り移けり城  
徒の者級三千二三百を埋りて有馬塚と云  
ふも其子あり其子刑地と云ふと云ふし其の  
ありしを云ふと云ふし其のありしを云ふと云ふ

を記す

○曰者又云年中行す法々々其の法々々果ありし  
のしり元三の施美の餅類大根芋菜と云く  
二日目々ヤルエラと云く喇山太政殿の女きと云く  
一唐風の遊子出で盛装する其の編漢書に  
四日目々々後述の式と云く十四日と云く正月と  
稱し元三の施美あり用ひては類の既三月を施  
美と云く名し三月三日より紙々々々々山  
よりより風吹の命と云く三月十日より無丸山十  
ありしと云く山二十日より念獄地と云く  
紙々々を信し五月考糞と云く又刻花と  
名しと云く木深地稲作海と云く船遊港を行ひ





其の六衛乃ちける長衣あつての年ふ成るまで  
高ししゆり精巧体るを産するよめあり  
之を朝廷に献上朝廷洋く之れを愛せしめ  
毎年内進に朝廷せしむることあり  
是をち華法ゆきと法僧も法僧も  
あまう之に菊花の素及びを飾り紋を以  
して御衣とすし其の純白類法衣の御用  
係るこのをも併せ産する之を献上伊集  
といふ

喜右工門の子喜平次亦良工より好喜平次  
陸大掾に拜し亦好む技巧より中なるを  
を以て磁器其上より産する体なる抱え

を兄に試み之を懐りしは一個の磁器  
の中なるを製出味ありきとあり茲に  
大なるもの下り所あり外包の袖より中なる  
のきを安定し袖葉と之れは縫合する  
つ之を極真とすよえん方の香草此獨特  
長技なる透彫の師を傳ふことあり

有田、長山、湯山磁器なる處なる各所の  
及山和料の土を成るを以て有田、長山、  
之れを製出する所の磁器なる且つ冬白  
きく、此れを磁器なるを以て是を多  
の磁器なるを以て是を多しとす我々  
の磁器なるを以て是を多しとす我々

具定卿

具定卿が遙々修業に來られると云ふ盛況で一時は寄信生許りでも五六百名有つたと云ふ、無論本藩の補助は有つたであらうが、表面は大隈八太郎と云ふ一介白面の書生が經營して居る私塾に過ぎなかつたが、これが因を爲して後年早稲田に私立の専門學校が建ち、今日の隆盛を致した事と思へば、伯は日本文明の先覺者として教育界に忘る可からざる大恩人である、因に此時伯がフルベツキ氏に就て熱心に研究したのは萬國公法で有つたと云ふ

書生から一躍參與

大隈伯等が危険を冒して時事に奔走して

宗

居る事を本藩では知らぬでは無いが、幕府を憚りて之を庇ひもせねば助けもせずと建言したが、血氣盛りの其は參謀大隈參與は中々聽さない、別して伯は其時代から辯舌が達者で有つたので、高の知れたる切支丹宗俺が一々説法して改宗させ、天照皇大神宮の御前に謝罪をさせて見せるから、ドシク引ッ張つて來いと捕らへしめたが、信心堅固な教徒は流石の伯も濟度が出来なかつた見れば、一面倒だ一三人を斬つて犠牲に供し、他を威嚇して改宗させ様と云ふ方針を取つた爲め、忽ち外國公使の抗議となり、長崎に汽船を差向けるな形勢頗る險惡となつたので、明治元年三月伯は東上し、大阪の本願寺別院に於て各國公使と會見し協議の席上、伯は飽迄

追放

自説を主張し、遂に天主教徒を長崎に追放して各藩に預ける事としたので、佐賀藩からも一々答禮砲を撃つて居た、其中に世は全く王政維新藩籍奉還となり、長崎に詰めて居た諸藩も引揚げ、不用の屋敷は改めて政府から頂戴して、夫々野人に賣渡したが、佐賀藩では長崎唯一の要塞を以て自任して居た、家敷跡に怪しい飲食店が出来たり、草鞋賣る店が開けるのを見るに忍びす、大砲を据附けた臺場原形の儘、政府に献納した爲め、近年まで爰に長崎分遣隊が置かれて、常に祝砲の響きの般々たるを聞いた、此砲臺献納方を主張し、且つ其手續に就て盡

うらやまの心を粉砕の意は正しく是も亦も願ふ  
錦旗の旗を正しくし関つては後には捨棄せし  
き来土の制限を正しくしことあり而して今  
や此知解け放縱の心あり

貳等 吳服切手 三枚 一枚代金

十



### 長崎府參與時 代の大隈伯

四十餘年の昔語り  
一代の巨人大隈伯日本を以て其後脚に思ひ出多き長崎の地を踏む、維新史の最大頁を飾る長崎と伯とは實に離る可からざる因縁あり、瓊浦の舊山河亦喜んで伯を迎ふべし、左に維新前後に亘る伯と長崎の關係二三を紹介せん

### 日本文明の先覺者

井伊大老の鮮血が櫻田門外の雪を染めた萬延元年の前年即ち安政六年、日本最初の居留地長崎の出嶋に、米國宣教師フルベッキ氏と云ふ靈界の偉人が渡來して傳道に従事しつゝありしを耶蘇教の幕府は何んと思つたのか、同人を教師に聘して新町に外國語學校を開いて多くの子弟を收容し、京都邊には鎮西攘夷の説が囂る中に泰西の新知識を注入するに努めて居た然に世は元治慶應の交となりて幕末の風雲益々急に、革命を謀る年少氣銳の諸藩の志士が長崎に往來する中にも

### 長崎守備の任に當つて居た關係

から佐賀の藩士が殊に多く、當時八太郎と呼ばれた大隈伯は、故副嶋伯に次で先輩様で、多くの連中から先生と立てられ暴れ廻つて居る中、伯は熟々字内の形勢を察して英語研究の必要を認め、幕府の建てた新町の學校に入るは業腹なり、且つ思ふ様に稽古も出来ぬ處から副嶋伯と相談して、浦五嶋の諫早屋敷一掃嶋より入る處にて目下石屋ある邊に致遠館と云ふ大々的私立學校の看板を掲げ、フルベッキを引つ張つて來て教師と爲し、藩の子弟を續々个學させた處、諸藩からも澤山の申し込

### 具定卿が遺修業に來られると云ふ

盛況で一時は寄宿生許りでも五六百名有つたと云ふ、無論本藩の補助は有つたであらうが、表面は大隈八太郎と云ふ一介白面の書生が經營して居る私塾に過ぎなかつたが、これが因を爲して後年早稲田に私立の專門學校が建ち、今日の隆盛を致した事と思へば、伯は日本文明の先覺者として教育界に忘る可からざる大恩人である、因に此時伯がフルベッキ氏に就て熱心に研究したのは萬國公法で有つたと云ふ

### 書生から一躍參與

大隈伯等が危險を冒して時事に奔走して居る事を本藩では知らぬでは無いが、幕府を憚りて之を庇ひもせねば助けもせず、表面浪人扱ひにして其行動に製府を加へず居たが、屢々京都に往來本藩より伯の身邊に探偵を附けたが、其探偵と伯が京都で衝突して大騒ぎを演じた事が有つたと云ふ、其中長崎に九州鎮撫總督が置れて長崎府と云ふ事となり、澤朝臣が長州の井上聞多(今の警備)を參謀として同道下向し來り、當地にて參謀と同格なる參與の職に据る可き人材を求め、大隈八太郎が然る可しとの事にて伯に差紙が附いてお召出しと成つた、處が爰に困つた事には、着の身着の儘と云ふならまだしも好いが、常に邊幅を修めぬ上に金が有れば丸山へ運んで了ふ伯の貧乏は非常なもので、出仕の着物が無い、伯は更に其歴な事には頓着しないが、同藩の者が見て居られないので一切の身仕度を海からして貴事事に運動の結果、新調方を其頃から繁昌して居た瀬川の藤瀬吳服店に法文といよく、寸法と云ふ事になつて當つて見ると、伯の着て居る羽織も袴も上着も寸尺が區々で合はぬ、夫も其時袴は副嶋、羽織は誰、着物

### 切支丹改宗說法

幕府は長崎の切支丹撲滅には屢々力を盡したが、九州鎮撫總督でも其頃浦上山里村及び市内に勢力を占めて居る天主教徒に改宗を強ゆる方針を執り、片つ端より高壓的に捕縛して來いとの嚴命を下したが、吏員は幾千幾萬と數へ切れざる天主教徒を一々拘束するの不可能なる事を申立て、外に何とぞ好い御思案は建言したが、血氣盛りの井上參謀大隈參與は中々聽きない、別して伯は其時代から辯舌が達者で有つたので、高の知れたる切支丹宗徒が一々說法して改宗させ、天照皇太神宮の御前に謝罪をさせて見せるから、ドシ、引つ張つて來いと捕らへしめめたが、信心堅固な教徒は流石の伯も濟度が出来なかつたと見ね

### 追放して各藩に預ける事とした

自説を主張し、遂に天主教徒を長崎より追放して各藩に預ける事とした

### 丸山遊廊の英人殺し

明治元年丸山遊廊にて一人の英人が斬殺された爲め内外の交渉事件

### 内外の交渉事件

が起り、大隈參與が談判の衝に當る傍ら専ら下手人を物色した處、下手人は海援隊に屬する土佐の藩士で、後藤象次郎にも關係ありと傳へられ事件は益々紛糾を極め、土佐藩は絕對に之を否認したに拘はらず、大隈參與は尙ほ取調を繼續したので、長崎に在る土佐藩士の憤慨甚だしく、大隈參與の身邊に不安に陥つた、是には命知らずの同僚井上聞多も心配すれば、土州の藩士山内容堂公も非常に憂慮し、私かに數名の刺客をして大隈參與を護衛せしめた然るに百方苦心して取調べし結果、意外にも犯人は筑前の黒田藩士と判り、一時に二十餘名を逮捕した、其中に今の栗野慎一郎氏も加はつて居たが氏は暗に十五六若の美少年と云ふ、長崎府の役人連も此結果は何うなる事かと密かに心痛して居る中、藩士の一人が罪を一身に引受け美事の切腹をしたので、大隈參與は直ちに他を釋放して事件の解決を告げた

### 大隈町砲臺の献納

埋藏地が出来上つた今日もなほ形見を殘して居る大隈町砲臺は佐賀本藩の屋敷跡で、佐賀築前が一年交代に長崎守備の任に當つて居た、今より五十年前の幕末に當り長州の長府で外國の聯合艦隊と長州勢との大海戦が有つたので、佐賀藩は萬一港内深く攻込まれた時の防備に、大隈町の屋敷に砲臺を築き、數門の大砲を備へて嚴重に固めて居たが、幸ひにして事無く済み、諸外國との和親條約が締結され、昨日まで敵視して居た諸外國の軍艦が、ズン、入港して來て祝砲を放つので、佐賀藩からも一々答禮砲を撃つて居た、其中に世は全く王政維新藩籍奉還となり、長崎に詰めて居た諸藩も引揚げ、不用の屋敷は改めて政府から頂戴して、夫々町人に賣渡したが、佐賀藩では長崎唯一の要塞を以て自任して居た、家敷跡に怪しい飲食店が出来たり、草鞋賣る店が開けるのを見るに忍びず、大砲を据附けた臺場の原形を、政府に献納した爲め、近年まで愛に長崎分遣隊が置かれて、常に祝砲の響きの賑々たるを聞いた、此砲臺獻納方を主張し、且つ其手續に就て盡

### 勘定お構なりの豪遊

大隈伯は若い時から勘定お構ひ無しで、算盤杯は絶えず手に取つ事は無い位ひで有つたらう、夫で書生代から豪遊を試みたので着物の無いの當然である、一躍して參與と成つてからは日夜渡りて役所に在時でも其頃高價な麥酒を湯茶代りにグ、と呻り附けて事務を執ると云ふ有様で有つた、遊び方は藝妓買より女郎買で、町の方面には餘り出馬せず多く丸山許りで深い劇染が烟草屋に有つたと云ふ、話

### 無の方でした町藝妓は棹

が重でしたから町藝妓は棹筋が無かつた様に思へて居ります

### 翠丸有無の裁判

良夫に縁を請求す

京城府仁昌山下其井一統二戸元根の娘翠丸(女)と云ふ明治四十五年五月京畿道揚州郡志愛面馬居住金輔堂(三)に娶らるれ同棲せし、翠丸は翠丸が無かりしより且つ驚る且つ呆れたるもさりて當人に打ち明けて苦情を並べる譯にも行かず思案の案酌人に其旨を告げたるにそんな笑ひの相手にはせざるより厭々ながら一年餘を過したるも考へて見れば翠丸が男と夫婦となつて居た處で子供も出ず何の楽しみもなくて是に加へて始はのやうな根柢に鄭姓女を虐待するよ堪へ兼ねて實家に歸り之れを機會に良夫に翠丸の無一事を持ち出して離婚を求めしも金輔堂側にて翠丸確かに有りしと應ぜざるより金輔堂を相手取り離婚請求の訴訟を京城地方法院に提起したり裁判所でも憚らぬ訴訟は始めてなれば民事第一に於て花田裁判長森田李兩陪席の係にて双方を審問せし處金輔堂は體裁恐るけに自分に翠丸の事はない事は公然の事實で自分の先代は元傷韓國政府當時の内官にして自分は其の養

3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1







毎夏ハ日勤も及ハズ在在しと云ふこと  
を得ては其の收穫も亦少くなく

存入ししと十石の深更にすもの概と一石  
中の多量もすく足る能はずの多額を  
しと足らん出づる我が記念祝典の  
記念もすくはる樹を七枚と云ふ  
風吹を添く樹を接ぎ木林の下枝を  
すくしと樹をすくしと云と遠視す致  
向方先づ成印も樹の純心と較ぶんハ  
う〜無むと踏み入るおと無むと云く  
ハ湯子の樹樹皆おとす〜と樹をすく  
〜と云〜と云樹をすく山岸も又湯淵も

是よりして園中の樹も云ふん〜と云〜  
あるは樹木も何れも食しつ物もすく  
路も流る四の目垣をめぐらしやと出  
捨てるん〜と云〜と云〜と云〜と云〜  
松の葉もすく〜と云〜と云〜と云〜と云〜  
しく刃ぬき入る〜と云〜と云〜と云〜  
く形ひま〜と云〜と云〜と云〜と云〜  
し〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜  
の他互を認し〜と云〜と云〜と云〜  
名く七列を造し〜と云〜と云〜と云〜  
と改列し〜と云〜と云〜と云〜と云〜  
一也也〜と云〜と云〜と云〜と云〜





を投擲ししるも、まじしるも及  
所の上乗るるも、余も此に  
つしものもさす

上一枚 引云く 下 引云く

明正廿五年四月十日 戊辰追撃三月十五日  
佐藤右三年戊辰三月 堀内角上副将  
十考任年廿五年 皇田大府此中無事幸氏  
矣回志ある地此全 如何為進土思之獨傷神  
都此佛治如乱麻 八萬幕府士置我為大所  
此の余別品川牙色 和奉奉天策今見全都安  
既冬謀法士所 兵軍勿嗜殺 全都空

冷西心村田中村 我を清心術倣魚村那海  
教氏比改為名も 宜兵運城の和我直南河  
毛人余指以名朽無 一朝誤城の万業化弱能  
用之身風全至干 壬辰晩王  
今冬の毛も不可 汝舟後安芳  
思誠有如此も然徳  
田之信因の絶句

三輪海舟と交互して百訪のり  
冷心此の信を考しる已中  
一書三輪をて  
聴くし三輪行を湯心ことを

小菊のつくへ、其のあはれをいふは、あはれ  
と三福強をいひ得て、くさくさ

小菊は二枚也

一枚は、きき草、夫の根の中と

書きよく印物の根の中と

池の七、而、白根加草、の、と、性

数、あ、と、を、つ、め、さ、ら、う

竹、え、き、草、を、め、う、き、き、あ、り、な、し

よ、あ、深、く、及、取、味、物、を、さ、ら、う、を

花、中、の、き、き、取、り、あ、げ、下

此外、延、世、又、の、梅、系、附、土、出、克、芳、山、河、山  
あ、聯、梅、南、明、西、梅、オ、別、と、古、池、に、あ、る  
カ、と、延、世、の、墨、印、取、也

左、花、の、場、し、上、月、林、言、星、堂、家、帝、大、左、殿  
廿、五、年、祝、賀、分、り、あ、り、余、も、上、美、の、春、文、の、一、人、う、と  
あ、る、豊、城、文、物、出、附、の、う、り、関、係、し、た、と、以  
つ、て、辨、令、の、刻、前、も、い、ふ、論、上、の、物、特、に、あ、り  
く、判、り、他、の、あ、ら、う、と、い、ふ、多、数、を、辨、令、に  
あ、り、あ、ら、う、と、い、ふ、あ、る、あ、り、人、の、あ、ら、う、と、い、ふ  
い、あ、の、家、族、一、百、十、五、一、名、あ、る、或、を、辨、令、に  
の、こ、と、と、い、ふ、言、を、あ、ら、う、と、い、ふ、大、湯、を

房上首の年北代の苦心落き

いあの御を西岸の原印ゆねを出て境め衣冠  
の敷き入りしを廿二日の流りて者せし  
入つしは... 井お... 先づのりの... 痛と増ぬぬ... 痛むを  
こたも... 家(山)の... 勤め... こと... 録...

ハ... 腰を... 心... 月二朱... 人... 心... 年... 一... 分... 手... 古... 婚... 法... 仕... 書... 懐... 苦...









くまの也

一 つまの也 花 花入

一 堆里うらまの香の也

一 州の也 倣文也 大の電の也

大の電の也 九の也  
おしとある家の煙いさるを

きしとある

一 倣文也 州の也 西武大の也

一 香の也 香の也 香の也

香の也 香の也

一 田上也 盆 二程

一 程の也 程の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

しる也 高松の也

右三に 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

高松の也 高松の也 高松の也

一 高松の也 高松の也 高松の也

高松の也 高松の也 高松の也

高松の也 高松の也 高松の也





を降き縫きこいのを植込也  
七松の根しえに能き其葉を果枝の  
也

杉林の背ほるある生塙疎くしめ  
るを切し杉木の縫きこいの數十  
本植き其葉を塙根に次めを植也

井中の松葉を一掃す  
古木の目言をこたす塙根のこいの  
植込而もこたす四五の縫樹を  
入んを改也

後園樹木の肥を改む斷  
多きこいのを以て降き去る

他、物す

物を前塙根を延長し以て高く多  
く山茶花を植込也

茶の間に一枚降子の何れもすの雨垂  
れを以てアスタロトを植て其葉を  
こを付、物し其葉を枝

余の作は意通り絶也  
在りこい而倒るるを似たりと其葉を  
ハッありあるを切し其葉を焼し  
夏改する毎に御り其葉を以て可を  
覚かんとす其葉の満足の成入るに如

也

○山の所心刊の会中四紙の針書は未だ  
高しし事あるも、甲乙丙三程の  
を、七選擧を合ふと、許す方法に改  
めんを、目錄三換入なり、先角  
病と三程あり、何れも、未だ  
き、也、小敷の合ふを三程に合つた  
と、字、危、険、あり、如し、或  
二程の、是、は、標、あり、ある、こと、を、せ、  
危、険、あり、と、注意、を、世、に、流、  
こ、を、標、題、の、つ、と、あり、し、  
又、云、書、の、名、も、前、紙、の、名、と  
同、し、く、何、れ、も、字、の、形、を、合、ふ、

(新聞廣告原稿用紙)

甲種

参考 太平記

二

海録

内子紀

甲種

参考太平記  
 参考保元平治物語  
 吉川本吉妻鏡  
 當代記 中田時睡  
 山科三進日記  
 小右記  
 正統所夢紀事  
 参考源平盛衰記  
 列侯深祿録  
 明治巡幸録

一 一 三 一 三 一 二

乙種

海録 山崎曼成  
 新編文藝叢書  
 實事談  
 怪談  
 寓言談  
 教訓談  
 脚本  
 降瑞  
 酒落本  
 詳判記  
 俗曲  
 譯海  
 大港首  
 時代記

一 一 一

丙種

古書便覽  
 米平年表  
 佛教集說  
 雜信雜行叢書  
 日本書目画苑  
 武藝叢書  
 能樂叢書  
 雜藝叢書  
 玉塵抄  
 鴨川經濟叢說  
 鴨鴨曉華  
 熟寫漫抄  
 春花秋月集  
 蒼海一編集

一 一 一 一 一 一 一 三 三 二 一 二 一 一 一



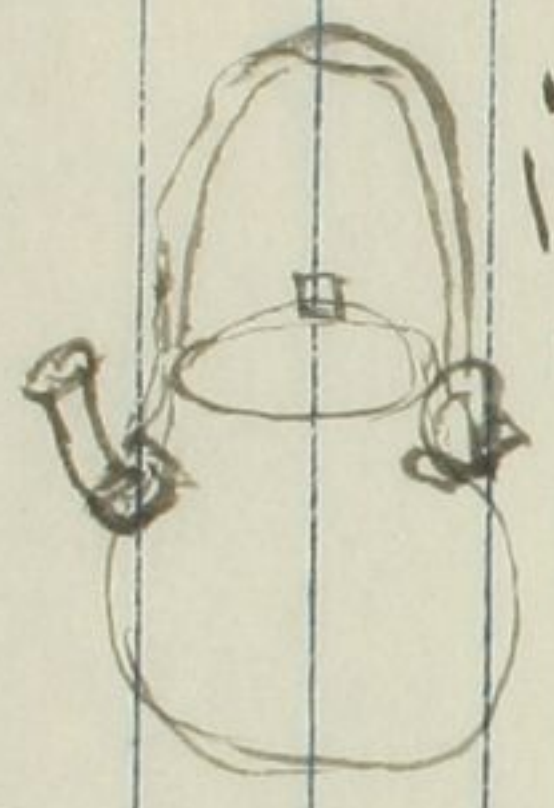
○山崎の心刊り会中四部の新書あるを  
高くし事なるふらら甲乙丙三行宛

る方々へん能くの二冊を  
一冊と云ふは其の注を  
うへり十二月(○)  
○度別をなく其の一冊を高くし事なる即  
辨入

朝録 石巻

湯

丸



腹行の字

其の蓋共八寸許

柄 其 鉄

一つの名をくらげきそ心うらるゝ石錫の如きも  
挿まじし其の疵うし其の特徵と湯早く  
沸き容れぬ冷即ちが候挿てさること全族と  
異るゝが柄のつけふ口の心うり方皆々朝録  
つ物做すて古箱也油を注ぎて石の功を  
究む大あふらるゝ油如をえり  
即ち在の常一用すはすともふ(十二月六日)  
○坊司 葉史 と猪の北本梁山丹学士  
の遺者 葉 錦高木壽親の因次壬辰の歳  
刻す所 余葉を集らるゝの傍ら此方を  
○挿もむすゝこ入し 而して傷れんとす  
た 挿もむすゝこ入し 北者葉の 死に比すん心

記すもく先々ふの：海久すへき者ありし不  
律り者 葉 無さのりさるの者也  
○取芳と今う 芳さく世の中ふ 立敷くさう  
こそう 人十の凡心 手而る及し 言ふ 徳地  
唾棄すくし 方捨心 衝るを 曲は法の徳士  
とまふの 芳のあり 必玉果立テ： 函挿も  
者るを 芳： 叶れを 必玉 必玉 必玉 必玉  
こそうも 芳さく 其 葉 挿も 終る 終る 終る  
らう 葉とくも 必玉 必玉 必玉 必玉 必玉  
いそすんて 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ  
のふめを 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ  
こそうに 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ 必玉のふ



















ハコを叫ぶ

本多山とてシヤワリと云ひ自動車之感  
入る運送業と利の目も入るんがとて  
感するもあつて軌道を走り電車を弛す  
このときとて何れもあひひもあつた  
この電車の代り自動車之感  
時代とていふと電車之感もあひひ  
自動車とて電車之感もあひひ  
ハコを叫ぶと約十分の一を走らん軌道を  
柱の跡をたたく不田也唯れは終を互  
ちは可也軌道を走る土地の跡又ハ  
ハコを叫ぶとていふもあつた

この自動車の中空のゴム輪  
車の上を走る中実の輪を中空のゴム輪  
の價も廉、自動車もこれに乗ると便  
車の上を走る中実の輪を中空のゴム輪  
とていふもあつた

平原

人

此像も少の座を後終する  
此像も少の座を後終する  
此像も少の座を後終する  
此像も少の座を後終する

不慮をんともある日の暮らと下  
夕も老しし悔入  
於此心百体の内と此後之傳  
ゆれと其のまあるうりうもや  
ち改つる人か何の節を千又  
九億をこれとゆふらんをち  
ゆふらんを但し明代の世さく  
材の作るる木地とんし立形  
式推致あるふれ此の心うま  
くわとも三言まへし

山新三藐院  
自書

海東天竺

三藐院の人磨の圓遊を  
行々ゆふここの余一場と  
是もすそふと甘又其の年  
節入りゆ珠也此のま  
其のまをゆふらんぬま更  
こも此也 圓と三藐院一  
流の古きを拾う或人と云を  
るまこいさ扱るんまおのり  
こも三藐院味と甘又其味  
ゆふと掬うこし久松とまよ  
公家の家系をゆふこいさ

マツリニ投せし扁額  
一休翁の節一丈云

剛松二尾

八十八歳の節とある心致  
年也 権助の節とある心致

海人の存在者名(意)志於一樹也  
此の款者名に揚言するめを乞ふ

一 江山の節一丈云  
香巢

こゝ又海人の存在する用也

意の節

梅村多きては揚言するめ也

此等の節を心してする人ハ七二揚言  
するにても是れくんとす

(大正二年十一月十日)

○外國人の浮世情に對する感惠を以て其  
唯其興味あるを以て邦人の愛する所の  
いふを以て浮世情を邦人の愛する所の  
いふを以て研究せん海人の此方面の

美術の格とを考へてつゝお世評にあらざる也先  
以て其文七の卷とて四巻の格とて陳列すも  
曰く此の格とて格とて格とて格とて格とて格とて  
三外人の説を抄出し示さる。余その格とて格とて  
佛元家の格とて格とて格とて格とて格とて格とて  
列傳の格とて格とて格とて格とて格とて格とて  
その格とて格とて格とて格とて格とて格とて  
んとも及ぶ市に格とて格とて格とて格とて格とて  
の格とて格とて格とて格とて格とて格とて

大正二年十二月十一日

佛人の格とて格とて格とて格とて格とて格とて

歐米人の眼に映したる日本の浮世繪に就て

佛人の説二三

至し氏謂く又兵衛の畫は古に稀なるを以て暫く  
措いて評せざり師宣の筆は柔かき強き簡易  
て盡き其人物や態容優鏡りて能く心意の寛  
裕を見まし人をく当時盛満の氣を慕けむ洵  
に浮世繪の巨魂あり  
アラビヤ民は凡て人物を描きて俗氣を離るもの  
神靈の像は若くはふしし神靈の像は不動靜  
止の容を以て至りたり苟くも活動あり必ず

俗氣を帯ぶ希臘人すら猶且之を免れず水が  
獨り夕ナグラの塑土像は流俗を写して俗ならず神  
靈にあらざるして神靈なり又春信の画は専ら  
當世の風俗を寫し活動を描いて俗ならず粉彩  
を施して鄙ならず皮相談は精神濃なり  
嗚呼夕ナグラの塑、春信の画婦一氣韻清香人を  
して塵外に在るの想ありむと。

ゴンス氏曰く骨法の健意氣の迫。點線奪ふ神  
なるもの春章に若く膏まじて文調り做り共舞臺  
扇を寫り而して文調其技倆は愕く又重政

と美人合を作る而して重政暗に已か運筆の  
硬きや覺ゆる春章なかりせば浮世繪は凡菜は走  
しきりのたるの誹を免れざりしならん實に春章は  
浮世繪の英傑なりと。

ゴンスーん氏は文壇の老將あり歳七十にして一書  
と著けし題して哥磨と云ふ蓋し全篇哥磨  
の能を説くものなり也膏まじて人に語て曰く凡そ人物  
の画にして老幼其齡に通一剛柔其の性こころに合ふ  
もの極めて稀あり而して溫柔の能を寫すにむ  
そは古来画家の最も難しとする可なり其也

を能くするの獨りワットーあるのみ予哥磨の画  
と視るに其所謂最も難しとする所のものを能く  
せり即ち婦人の動作を写すに身在るの如き  
是より其畫く所毎に是同一の婦人あり而して  
之の動作を見れば是は百畫百態活動の  
趣きを異にし能く其溫和の性柔順の風を  
寫し見るものをして佳人投念の状を自擊する  
るの思ありし予一たび哥磨の畫を嗜みし  
より他の美人画を見る毎に怡し針止る蝴蝶  
を見るの感ある能はずし。

ビュルチー氏嘗て曰く一風あるものは必ず一癖あり  
故に資性卓絶ある者は從て人目に觸るるの  
癖あり而して其癖や却て其才能を發露  
するの媒介とある然り而して其才能を物に發露  
せるを評するに當つてや小人は僅に其癖を窺ふて  
己が愛憎を説き大人は其癖を怒り直に其堪  
能に入る北齋の畫は其癖最も甚き者あり  
而して其妙趣を會得するに及ばぬ愈久うして  
愈感嘆に堪えざりし予屢々畫家を示す  
に北齋の画を以てするに大家は其能に服し凡工



は其異を嘲ふ蓋し之を見る人の力以て其妙  
を感じたるに足ると否とにあり予偏く古来の  
画と見ると意匠富遠りて運筆自在  
あるものリユーバンスの右に出づる者あり而して  
森羅万象と等し 頤に懸けて畫界に馳  
駆するものは獨り日本の北齋あるのみと

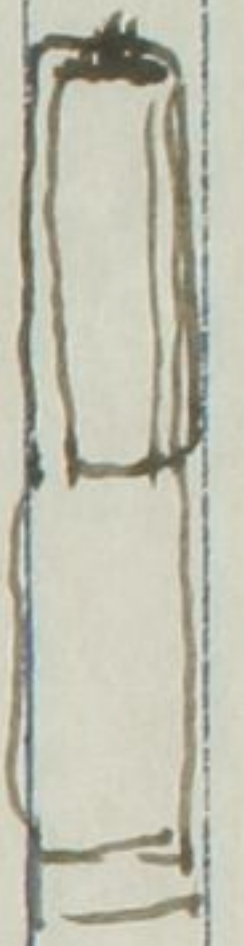


十一月十二日 雨やみしきき  
山尾子行とをんと稱すは  
半道に於て象刻をみる余  
の心は変思しお印を心  
えんとしし 始と變  
思の内におのりて渡お  
の二字あり、清人の音に倣うるもの  
余お印五六程を為すと名も未だ此の  
言不のしあるし、子行の始を弄こひ之  
れを變思市の珠と云ふ  
○十二月十四日 平山を移す其外一り物  
を移す 始の古らん心 晩年









柄形味粉を花生油に  
 混ざらしき油を漆を施し  
 ちりおのめ代あるお  
 又ふるスツキリしき

まうんし

利休古像

木像よりあぶりの  
 漆施しある心と  
 最上と云ひ難き

七下必ふありとたあゆのめ代あり

高麗一輪生

徳利形象眼  
 こりきくのた  
 柄ありと云ふ

眼出しと云ふものをえしと形め代ありと  
 今其ふしものを造る異なり百十の  
 輪生に入はえのしもの也

銀巻小鏡

外印とあるものの細  
 刻ありし異ぬるもの  
 甚しと死すめ代也

ありしやしきと云ふもの也

作

洞簫

漢字の鏡を討  
 す漢字を鏡  
 木漢字のり也

洞簫より花ありと云ふ  
 小書入万毫の尾の者ありと云ふ

色と効各二口ぬ。人しき海りせき  
こころんを其の心味押入へき  
ちう

膳 五八



リと底うし味をこ白也

木地 楯くじのき

裏： 考枝寺什

物： 梅院と朱漆

： 銀ありと中央

小言と朱書し又

梅花と書しの印也

○古の海道の物々二方の所を記す長五二

山あせ十七帖 古本出陳ありし安四を長し  
ゆりんとと古のし謀る古の一説し  
しるは本ありしえらこのもの敷ありん  
錯へ向うく謬もしくけけありし癖を  
記ししと新の安のとあるゆりし買入  
九つとと訂の本ある田の候をあらわし  
ゆりしと古のうさの也ゆえとぬめり  
結果とえふへし

○太平記 四十冊と雖も大本を二巻  
名文を三枚目二枚目并二二頁の給  
を海山 大本太平記の終ありしあ金の  
初めし見る也のたも善るしきおお体



ろく元とすとの丸七也守の案の此原  
凡と真と余の言をのり守り案の  
の三とある歟又案及定と其人の  
意と異るとか評しとす

○存命由之を物とし日馬江津其蘭言入  
方簡一也一とす地と西毒方何吉高  
を其ふ、江津のちの問をか中や未に左  
くす蘭言入強と致、此の存命と細  
川進有杉永貞徳寺簡答を臨とめ  
此二物を存命の花名物を山とす  
出取してすまふけしとす破瑠散乾光  
扱考日乳中と勤とす所のこの格也

の出来あるあつこんと此寺の方簡を  
云と得もいさう存命は辨のまの  
その者類山物少のなる物とを  
○文亦在方底意奈に移し中唐鄭恒  
大人崔氏合神墓誌原本を得法同  
め、欲んことを新羅版に附し北漢  
一帖をとり余もとす性と略す、此の碑  
の崔氏と西唐の心守の墓との事  
結と吻合した来ぬる家此碑と其  
す固らるる佛氏の物合えと彼んと  
或をいさうおおるん所と又活物  
とありの資とるうとすこの也此の



本居、天因、雨村の義、淑南、内、孫、角、山、の、  
の、後、身、と、垂、曲、考、流、ち、と、一、漢、興、味、を、  
つ、元、ふ

○歳、使、洞、味、と、英、名、を、合、字、に、余、歳、生、英、  
名、の、家、の、不、此、名、と、重、多、ひ、ち、り、多、く、英、名、完、  
つ、て、同、く、名、と、す、る、英、名、の、名、の、任、侠、と、慈、善、  
と、廉、潔、と、名、の、名、も、多、く、又、同、の、名、を、  
多、く、人、の、為、の、名、流、の、多、き、ハ、保、の、名、自、身、を、  
累、す、る、こ、と、多、し、山、嶽、晚、名、と、名、の、物、を、  
流、の、此、の、名、を、以、つ、て、流、と、名、と、ん、比、美、く、  
浦、後、冷、の、一、字、を、處、世、の、加、味、や、と、余、此、  
人、と、此、名、を、知、り、き、一、聲、を、喚、び、し、て、回、く、卿、

の、余、も、亦、亦、勅、ひ、つ、所、言、う、余、の、卿、の、勅、め、  
ん、こ、も、所、の、こ、の、卿、人、の、為、に、此、の、名、と、  
す、一、と、之、の、何、ん、を、自、之、政、の、ま、と、英、名、  
の、一、と、感、分、と、い、う、名、可、也、と、一、と、所、の、名、と、  
が、一、と、其、名、と、而、名、と、し、一、と、和、名、也、

○本、都、に、嘉、刻、家、園、山、大、正、と、し、市、其、英、名、  
英、名、碑、板、本、と、名、と、一、と、其、名、の、英、名、と、  
恩、院、流、中、一、心、院、と、名、と、一、と、此、名、と、大、正、の、  
善、世、寺、と、名、と、一、と、位、し、と、一、と、名、と、  
あ、と、一、と、此、の、名、と、一、と、名、と、一、と、寺、名、と、  
し、一、と、付、け、と、一、と、名、と、一、と、英、名、と、一、と、英、名、と、  
と、一、と、其、名、と、一、と、英、名、と、一、と、在、所、と、

未考下大正の布下るるに碑陰に必手傳可  
 えんを得るるに於て之の思可也  
 の歳晚山尾無石と也：大正方入在る老田  
 中込を合作の印蛻を於て其の左に  
 収む



文  
 長母  
 相忘

長 中込  
 相 毛石  
 忘 保熟  
 丹 大正  
 春五に在る人



○平山書に於て深見玄岱書朱文公不自  
棄文横書と辨ふ此書首部漸如  
元岱の男云融補筆し此書尾二人の  
清に應し補筆の事を云々元配の  
跋ありし元配の書初りし見所書体乃父  
の似し獨云源河の書傳に似たり  
完配の書ありたるを惜むとあるも父子の書  
一書に存する所却つて殊味あるを元  
配文に見る此書傍陰日某家の心配  
と元し、傳に玄配の跋ありと元岱書の  
の終りし書也

○相次美二、今、山物古簡の法入時を物

才朝吹山物段前四十日前の古簡一通を  
秘するとして其由書を傳ふる山物自家の病を  
さ回し余の略血肺にさし出さう胃の事を  
嘔吐す血を吐し所を案すん肺を  
の病のよし表し肺の略血と云んハ不況を  
自身肺患を祀ふこと此の古物に徴も  
ゆらうを其力田の女と云うも折角の病  
の病をさす方けぬとありて其の氣配の  
る所をしと云ふ此書簡勒の仲の綴師  
又此書なるもの山物にありハ自家の病  
を肺を病と断し其書簡を余の未  
だ見ざる所なりこゝに記して山物傳の

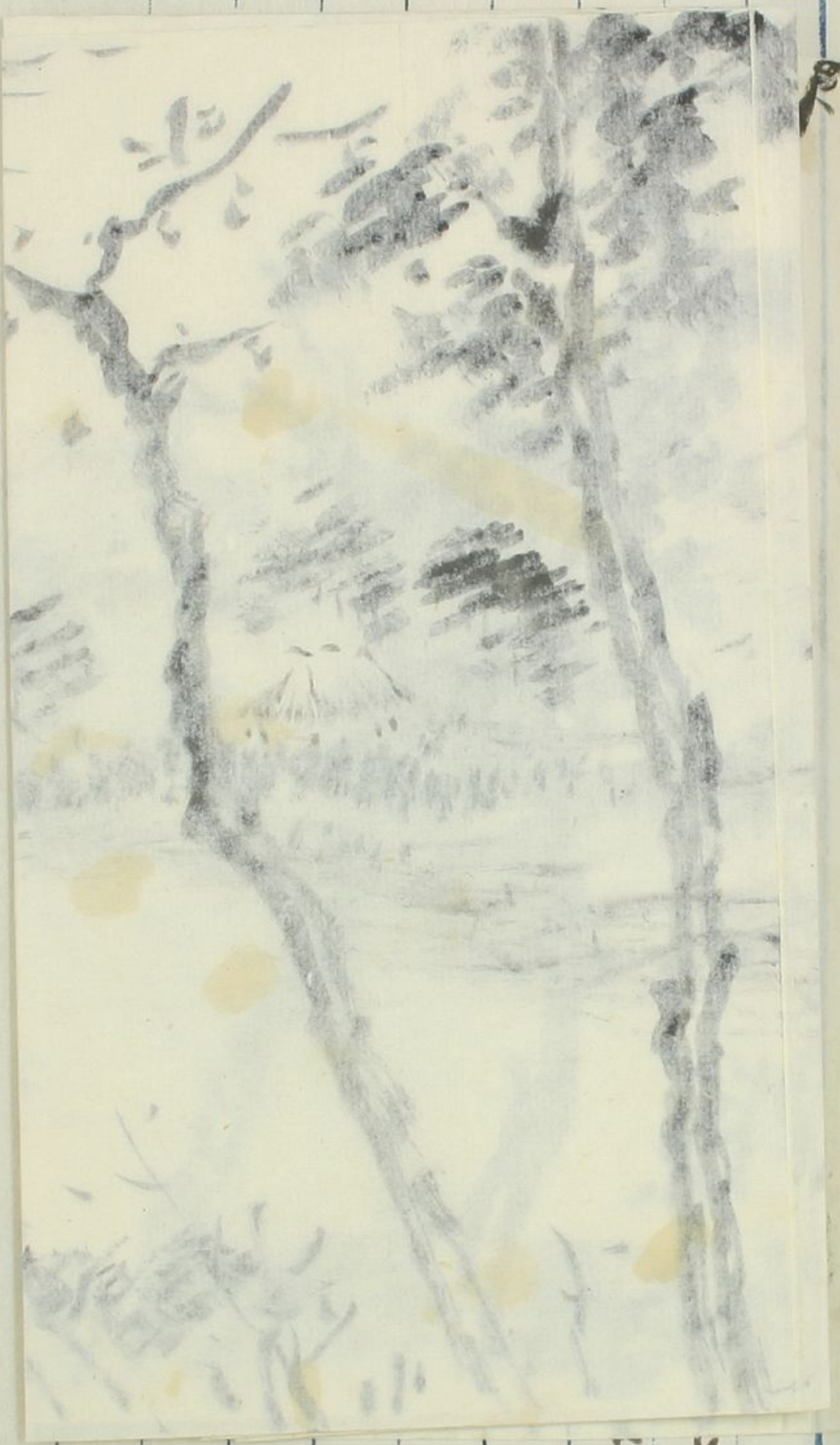






アキ、おれを四意と念ひし温るる。此脱後  
換と云ふ意すべし

○早朝大徳を物お伯偶に植物温るる者  
ある途中、余も温るるをいふしるる種  
々の脱後を試み、伯比城温るる大徳温るる  
の温るるをいふし、後終るる温るるをいふ  
伯の温るるを親に回し、新日中一も温るる  
ん、次々と伯、温るるを親に、東京を温るる  
おせし、おん、温るるを、温るるを、温るるを  
ある由をいふ、その温るるを、温るるを、温るるを  
入、温るるを、温るるを、温るるを、温るるを  
ある、温るるを、温るるを、温るるを、温るるを  
ある、温るるを、温るるを、温るるを、温るるを





長生堂の  
二世其子と別所平壯の  
為の絵人との  
好笑









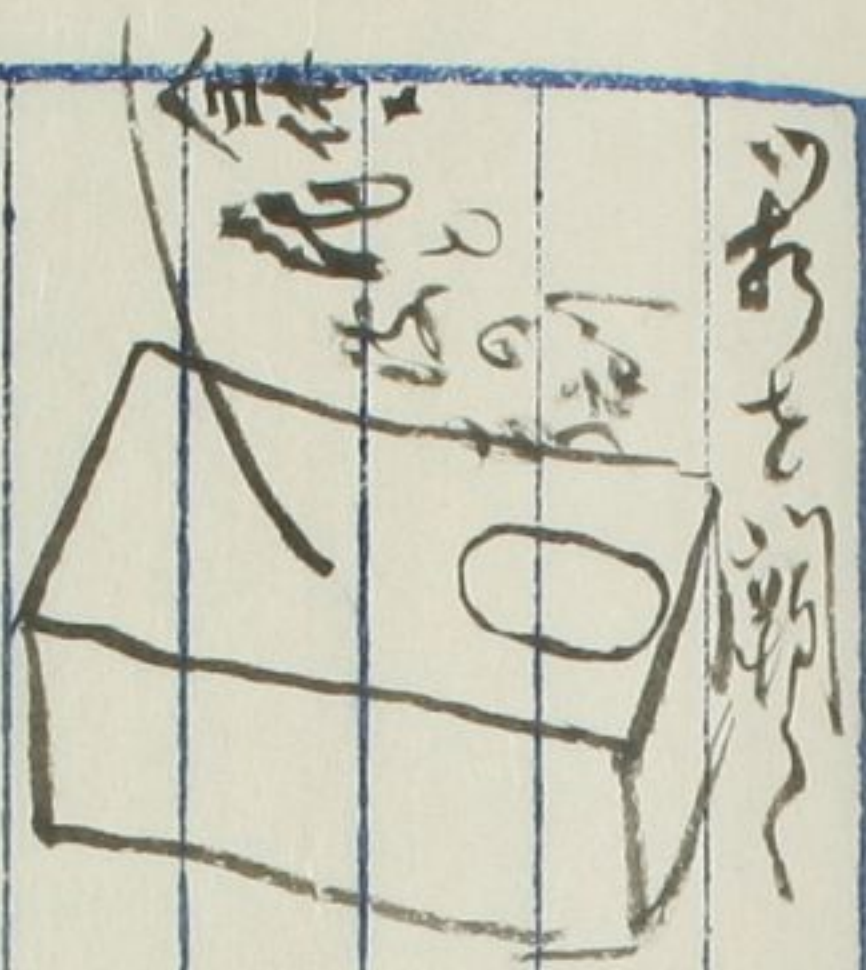
の傍現行の拾遺も昔公の怨重説の  
思辨し等と一般也と由説と余の迷傳の  
成見を代り怨重説七言の方使する  
之たり方の所を拈き正を拂けたること  
大也と極龍訣書に其の同く云あるの  
棄物不一大海辯子を可ととの帝大  
教授の志持るを之れに其の及評し  
老らせといふ余のそんを名案也帝  
帝の辨事みは徹る海を深し  
染事のたれ二つ也其後近政授を  
ちるめめ可也と終る成り放徒の  
人と興る法の人以年終に余を  
十二

イニカテうしを新言に花を  
くううく九は他地方の流り法出  
づる人の出づる道域をうしと昔  
華をを功の取をうしこと也と云  
員余のうし骨を重説味を解せと  
うをうしとくはを海に御の多け  
しと其の味のみある辨説はと云  
と海うし秀の海を松に其の同の  
を元たることを説七言の方使  
を鑑銅のうし賜るを鑑を鑑の  
意は須大星を出し七言の方使  
のあに献しなるものと同じに余

に差支ないことを確信いたします。實際近松は比較的淨瑠璃作數に於て多しだけ 此の表の示し通り

予量眼あることを以て天人と仰りあるを  
 出して示さる友の笑を詠しと傳ふるは行き比  
 ぶの御言を度うると程々大ききものも物を同  
 りするや又自分から是を言ひ出さるは又  
 心もなるがうらゐなきやと仰りて  
 さんびらうらゐの思つためはうらゐ一笑と

○新年初賀は瑞辰研き而を贈ふに  
 負うては刻もにおかしうては代りて  
 てもては味もくさるを思ふては雷波  
 のまきと名をこころと名をわらうては  
 龍門研の題字とて甚平とらんや  
 時代新く北極情をうらゐるは



幅三寸許  
 長六寸許  
 高四寸許  
 紙を麻葉より紙行をす

○所収書古田樂浪(古田)に採入るは其代  
 樂部一山也(楽浪の古田)中とて行々齋解  
 ありては西も新有るを言ふは得るは  
 也十七帖と古傷事次を伝へて古本と  
 比較傳文とちりて結果を傳へては  
 樂浪と人言へば樂人と傳へては古本

に差支ないことを確信いたします。實際近松は比較的淨瑠璃作數に於て多いだけ、此の表の示します通り

きりきり 毎回の書出十七帖を列陳し本を  
 奥書うけけんも一見是和代の書しきること  
 物を忘るる十七帖とて漢のつぎとてこと  
 此書のも貴き所以也序文のこととて漢本  
 群書新録のよあむこと二枚瀬けり他し  
 漢書とてこととて此書に相校すんか  
 亦し得ししとて樂浪刊の金本(傳本ありて  
 印刷をいふ)の未を施ししをそとて漢書の  
 あり多きとて漢書きなり事儀應る本の漢と  
 相比しし結果を校す故志の中よあむ  
 本の漢とて漢をもかくさるうぶのよあむ  
 云ふ漢を比較ししとて奏ししをそとて漢成

こちよあむの漢書漢調りありて  
 漢書の漢書を古漢文じうぶる所即り  
 てもししとて云ふあり本を何人  
 ししとておとちしとて漢くんとて  
 こちよあむとてえしとて漢の本とて漢の言  
 ありありとてとてうぶとてとて  
 の漢ありこととて也漢字中よあむの漢  
 味を歌ふとてありとて漢の漢書を  
 名山漢書を云ふ又手鑑をいふ漢書のつ  
 きとて漢書の切りの漢文とてこととて  
 漢書の漢書を亦し得ずしとての漢をつけ  
 せんともやとて漢書切字とてとて

に差支ないことを確信いたすのでございます。實際近松は比較的淨瑠璃作數に於て多いだけ、此の表の示します通り

この作を傳明定と云ふ其人の傳海  
 へ先づ得たるを何ん大天夫と云ふし  
 あり、(大正三年一月一日)

創立五十周年紀念  
 入場券  
 武家調度及圖書陳列  
 大正二年十一月一日  
 自午前九時至午後四時  
 南葵文庫  
 麻布區飯倉町

此入場券

おもしう

出来り

えんま

味あり

心あり

墨の話 衣洲逸士

文房四具の中古人記述の多きものは硯を第一とし墨之に次ぐ、筆紙に至ては寥寥見る希なり、然れば有名なる宋の澄心堂紙の如き、其製造者は勿論、産地さへも定かならずと聞けり、頃日間を偷みて諸書を涉獵したるに、僅に墨に關する事柄數項を得たり、因て其中稍參考となるべき數條を摘譯し、且己が聞見せし事共を加へて責を塞ぐこと、しぬ素より有觸たる事柄なるも或は一場の塵談に供するを得べきか、

墨の起原は蝌蚪漆書の變じて隸體になりし時に在るや論を俟ず、然れど輟耕錄によれば上古は竹挺を以て漆を點じ、中古は石を以て汁を磨し魏晉に至り始めて墨丸あり、乃ち漆煙松煤もて之を爲る、晉人凹心硯を用ゆるもの、其墨瀋を貯へんが爲なりとあり、又一書によれば南北の時韋仲將始て搗煙和膠の法を用ひ、蕭子雲は仲將の墨一點漆の如しとていたく稱賛したりとあり、此兩説によれば今の墨塊

は魏晉以後に始まりしもの、如し、果して然らば漢代の隸墨なるものは如何なる物なりしか、隴廩は漢の右扶風郡の地名(今の陝西鳳翔府汧陽縣東三十里)にして随分僻境なれば或は所謂石墨ならんといふものあれど、諸書によりて考ふれば全く今の墨と同じき様に思はる、予の寡陋なる此事未だ其考を得ず、

唐代に至り松烟を以て良墨を製するものあり、祖敏、奚鼎、奚鼎、陳朗、王君得等其名一時に高し、南唐に至り李廷珪始めて腦麝を和して墨を製す、廷珪本姓は奚、今の直隸易州の人、其父超も亦墨工なり、唐末其子と共に歙州に移り、遂に歙人と爲る、南唐の時姓を賜ふて李と稱す、是より歙墨の名天下に噪ぐ、廷珪の弟廷寛、廷寛の子承宴、承宴の子文用等皆其業を繼ぐ、宋時長も李廷珪の墨を重んじ、東坡の題跋中にも澄心堂紙李廷珪墨等の語多く見ゆ、彼の有名なる淳化閣帖は李廷珪の墨と澄心堂紙を以て榻したるものなりと、宋代も亦名工多く、潘谷、潘衡、張遇、朱知常、葉茂實、葉世英、

劉士先等皆時に名あり、宋の徽宗蘇合油烟を以て墨に和し雜ゆるに百寶を以てす金の章宗人に命じて之を購はしめしに、其價殆ど黄金と同じといへり、明代に至り方正、羅小華、查文通、蘇眉陽、吳去塵、汪中山、程君房、方于魯等皆名工の稱あり、其中羅小華名尤も高し、嘉靖年間嚴嵩國柄を執れる時、小華を延きて其子大符の幕賓となつて、多く良墨を製せしめしが、嚴嵩誅に就きたる後其家産を藉没したるに、小華の製せし墨は極めて佳品なりしかば、神宗大に之を愛し、宦官に命じて徧く民間に訪求せしめ、羅氏の墨は一時珠玉よりも貴とかりしといふかく代々良工を出し、も、而も李廷珪の墨には遠く及ばざりしと見え、通雅及清秘藏諸書の載するところによれば、墨の光澤は紫光を上とし、黒光之に次ぎ、青光又之に次ぎ、白は最も下品とす、其試用の法、先づ硯を洗ひて墨を磨し、其乾くを待つて硯を水中に置けば、墨の上なるものは其色黒く下なるものは其色白し惟李廷珪の墨獨り藍色をなす、此れ良品の證なりといへり、

現存 近松淨瑠璃曲年表に添へて

此の表は將來大成すべき近松淨瑠璃曲研究の一部分でございます。古淨瑠璃曲研究を始めましてから六年、私は近松曲に就いて最も力を盡しました。現存の近松曲は、淨瑠璃の最も古い節盡しの標準曲とも稱すべき西口政太夫章句（この一節は節章句早覺えの事と題して聲曲類纂にあらはれてをります）の作者で且つ作曲者でありました、二代目竹本政太夫、並に淨瑠璃三絃譜の創作者と言ひ傳へられ、通稱を住所から松屋と呼ばれてをりました初代鶴澤清七などと同時に、即ち延享、寛延、寶暦より明和、安永へかけて二三の淨瑠璃三絃の名人が手を入れたのが多いのでございますが、中には近松時代其のまゝの面影を寫したやうに思はれるものもございます。近松曲を研究して著しく感じましたのは、曲が尠しも節に捉はれてゐないことでございます。普通流行の淨瑠璃曲によく見ます、技巧に奔つた末、一種の節見本のやうになつた曲がないことでございます。例へば同じゆりふしを用ゐても、彼の曲のと此の曲のとは多少の異趣を立てゝゐることでございます。今日、音曲の歴史を解せぬ者には、聽曲によつてのみでは、普遍せる淨瑠璃曲と劇場に行使されてゐるチョボとの本末關係を判明しかねるのでございますが、一たび近松の原作曲に就いて聽けば、誰にでも竹本劇との截然たる區別に驚かされるのでございます。一曲には必ず一曲の獨立した個性の權威を認める、これが近松曲本來の面目でございます。淨瑠璃を音曲の司と稱へました昔からの言葉も、私はこゝに始めて適切に眞意味を味ふことが出来たのでございます。

表中已に修了しましたのが三十餘曲、其の他も唯今實習中でございます。勿論三絃譜本は悉く備へてをります。拙劣なのは申すまでもないことで、ほんの形式には過ぎませぬが此の一二の全曲に就いては、私は自ら語り、自ら弾く演奏に差支ないことを確信いたすのでございます。實際近松は比較的淨瑠璃作數に於て多いだけ、此の表の示します通り、









アホロの像やと云ふ而も秋鳥秋草ありし  
るし凱旋記念のメダレ也之れを年賀の贈  
りよとす以ちある△某寺の欄間へ大小の百  
萬塔の錯雑するを透して刻りしを元号  
寺院しとす而も其の意匠也△歴史家往々  
骨董趣味と嘲罵す而も自身大なる骨  
董家たるを恥ぢり△又、キタマにて往々の  
形は泉水を心とて俗氣あつ厭のべし但  
れも山の峰と夕、キタマを細流を道す  
路を心とて雅趣あり△山林七廿の政老  
の光琳扇面屏風を其の其玉に托して  
十二枚を携へしえ扇面形のあつて

新年の祝をとり賜ふ事ある中五六枚を味  
あるさきより年賀の贈答としていふ  
ぬ也△卓の上へ五色を張りけの扇面を  
開き對斗を結して其上へ置きて一行の  
雅趣あり△直衣裂衣を利用して窓掛を  
作んと擬す地質紗を白くきこいの毛織  
毛のものを透ぬくを光澤を有するもの  
交互に摸物雅くしぬぬ可成其意匠  
しく見くすおのちやう印するぬ△浮世傳の  
創始も形を色彩を用いて、元々と價の廉  
きんことを務めるとも色彩をつくる技術の未  
だ幼穉なうま因るとも其味をわくす

リ作者の手腕も即ちあつた毛彩を因入す  
して而もよく見ゆる様なる凡庸者若の純  
くする事なきは、△漸やく一二の淡彩を施  
すこと行つた其の淡彩又一程の島味ある  
△多量の淡彩三毛毛を藉り多くつた色を  
うりて、いふ等の三色毛版と唱ふるその早  
其の風流も俗なる外人の劣る称歎す  
る所△此年外務の政務局長を刺し、  
其の妻あけを聞くは、匠者の門生彼の劍術  
は、~~...~~ 處で、而も人を殺すの秘法を  
この染めを無用の物と力をつけ、  
股間の大動脈を衝く一刀致命、專つる

この△秀の好流り中、高松市街のあり、  
高松一書を屋外に立て、一不敵を掲げ、  
をる、淡世目の地、いま、い、  
と淡め極きあり、古、  
△長崎のカステラ天下の冠、  
表く、  
を行、  
△新、  
の早、  
つ、  
出、  
と、

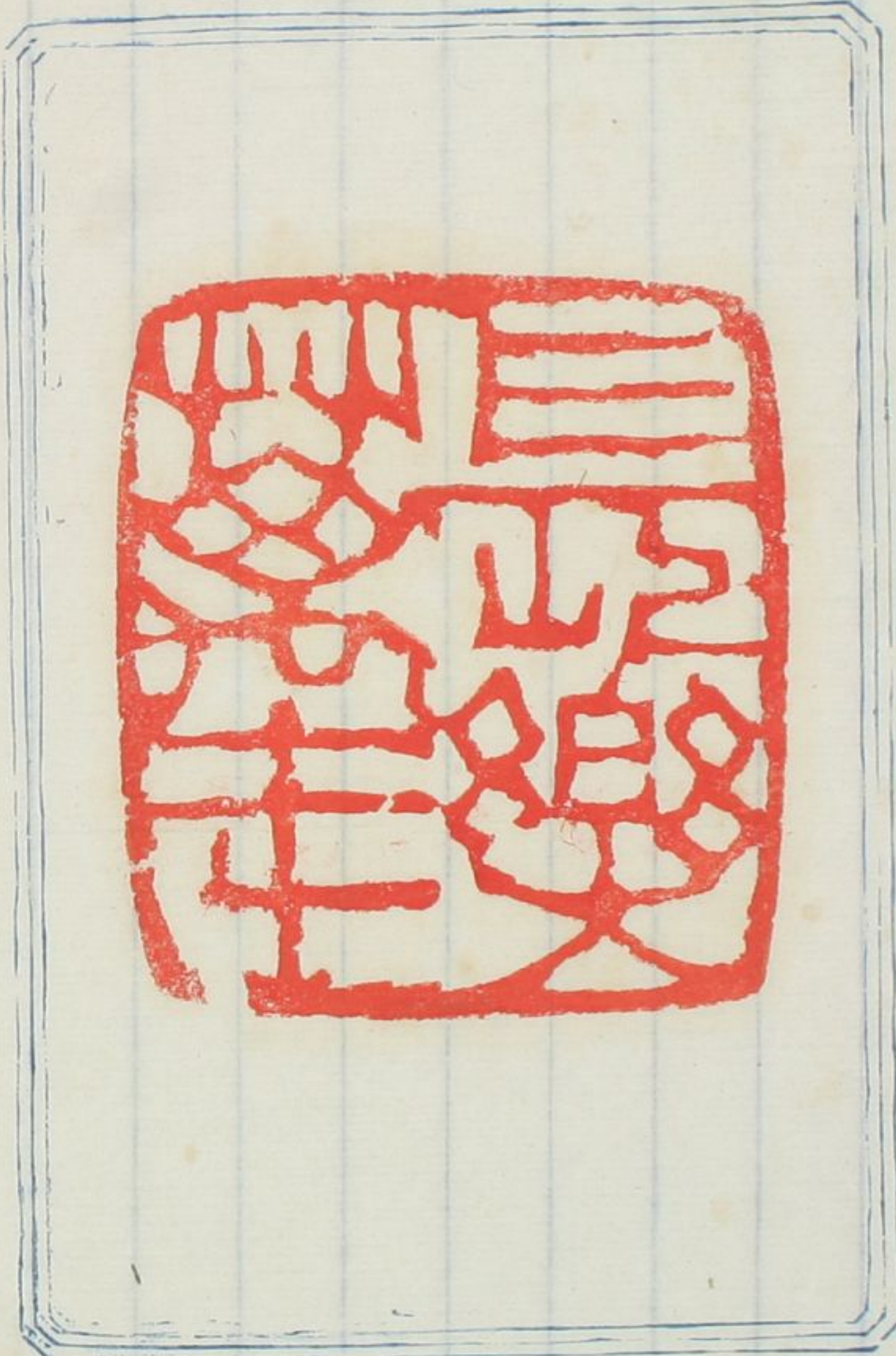












不白屋三十字刻丸也

一月十二日平山兵原の屋書也

幅二尺九寸の格取

白家の提生法を後き

幸巳文政四年春二月

於城西兵聖淵

兵原主人

士氣

不

宗星石院本梅舟

星石院本梅舟の凡そ南宗の画  
現時の人に見るに余りし余起人の画  
をいんと評し未だの了此画上人の  
あつたをみるも其画家の乃か可き  
の氣歎あり

黄蘗よりありし者梅舟

皇朝の古の畫の畫に及し法を後きを  
この古の畫の畫を及し其の  
物多し此畫を觀るの法を  
つべし  
あらあつたの隱るに無く木屑あり

此の畫の及する

梅舟中抄本

元人副皇堅白描水僊長卷

生紙本依賀候藏女兒秋鞠摹

滿紙水仙錯綜の圖を考す云直畫の  
高きべし

梅舟跋文云

元人副皇無所見張副成張副德之族  
歎此畫在依賀者錫島君許同時觀  
錢舜本嬰兒大設色長卷王錫符  
祝世祿等題跋俱為絶品  
此畫合世也秋鞠摹之兒所摹數

百福戊子京役船覆于鳥羽悉為龍  
宮之有獨此書揮入別送幸得免  
可謂有河漢 再記  
安政二年乙卯十一月二日江都大震伏加  
榊門邸罹火奔幸及此書無恙否又  
不可知 持潭三識

梅香の家近年冷落花什矣印幾と  
す所より其の大小の印のこども時余  
中に帰す此粉本の余を物するも  
ありと云ふへき歎梅香執味の先  
余此書を故人の为りて憂懐すと云ふ

紙本す切

此三ツ子を書き

和歌を添ふ

とこはらふまひきしとく飛鳥と

うたのこころにそこのうたを

深江野舟字口

歌を添ふ書とくまを添ふとく

山街山崎の横巻

山崎三ツ子の詞志の也

書作三ツ子の詞志の也

破紙と杜

此等父子比較の好試を  
用家相のし美ふ天心  
此の貴族の用家と紙  
の意匠の一端を記す  
美ゆ代りふ可也

下條正雄(村達)

紙本す切

枯木こみさ

此の畫一程の尺幅を余酷に  
愛す 此人のこみさ仙を畫く  
別難 仙子と云ふ

るんしと云ふ仙の長丈幅を  
この秋月程の幅を四六寸  
無仙子あ仙難死夫子不  
笑とお七しうげんを畫く  
此幅の幅きあふは美  
余のまの人の畫の杜中  
るんと愛す

○古も紙をきりぬす  
輪廓の形の形と切りぬす  
形花紙をきりぬす  
方の小も紙をきりぬす

あしきと様をうとて贖心入る。花形の多  
くは古と稱也

〇方ぬらとあるは家付表し回りの  
秋芳の造り所、生表と二階とあるは  
才一回の四疊才中二回と主四疊とを  
四疊才中二階と一才三回と一才二  
とあるは縁は也、徳の一方も縁は  
あるは田子

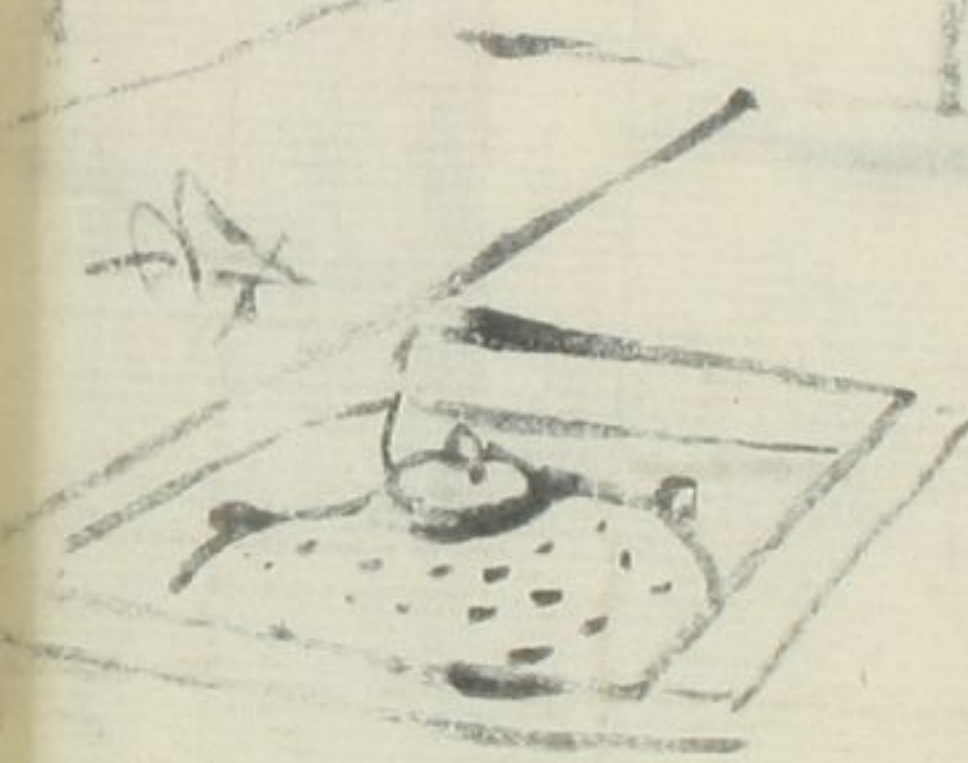
不  
分  
辨

外

1 kg  
1 kg  
1 kg

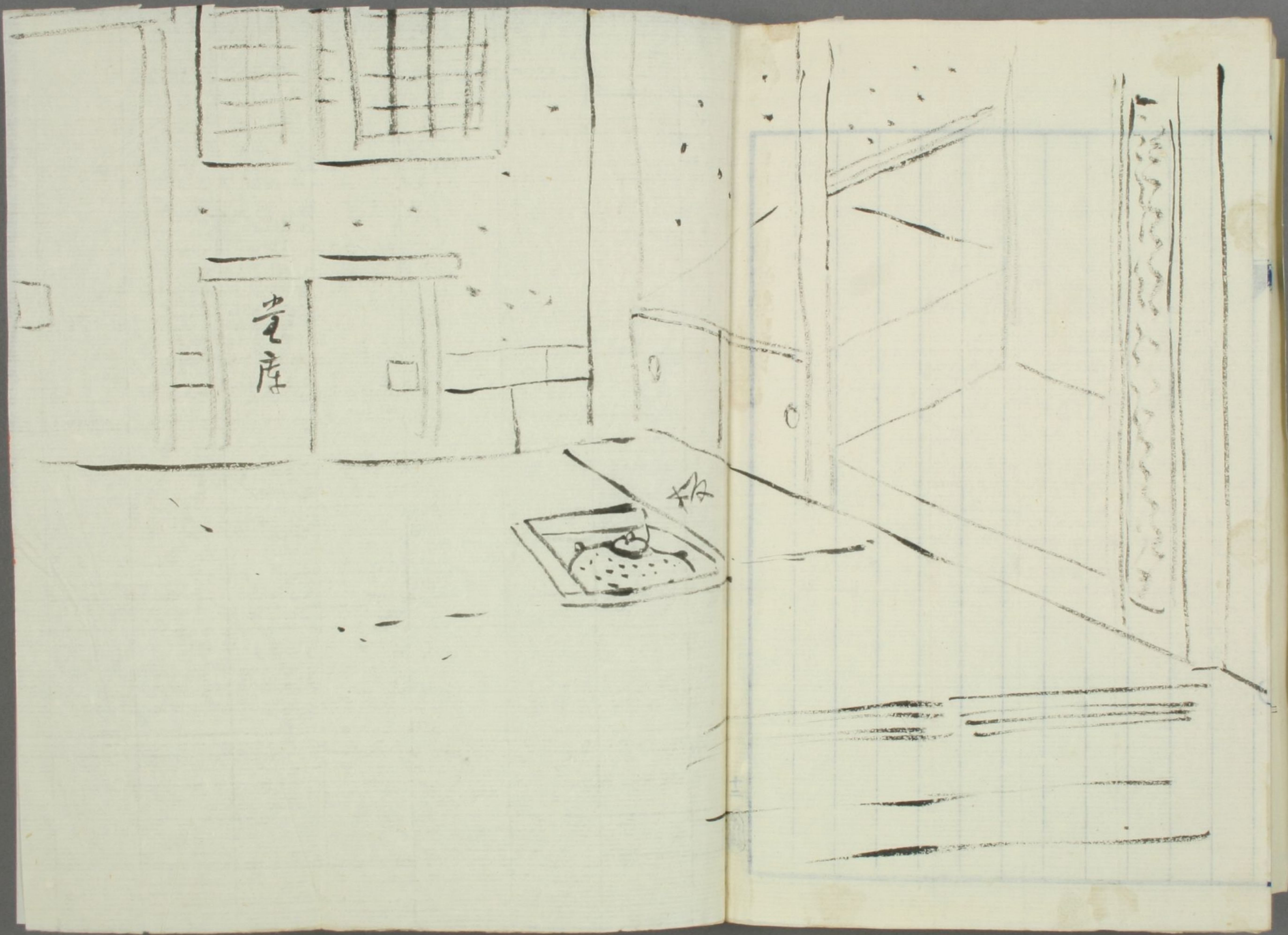
in  
Pick

1 kg



本

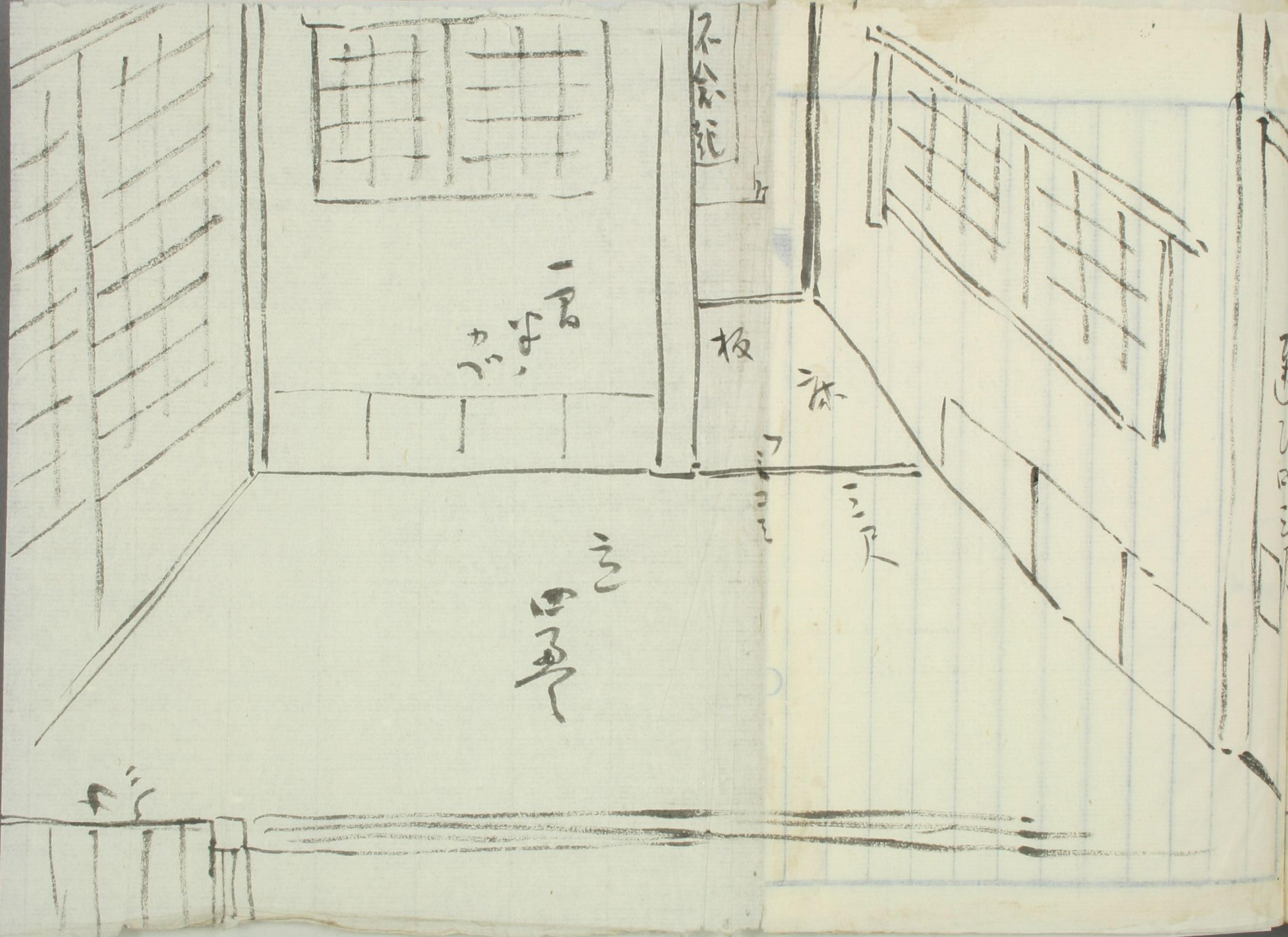
量  
度



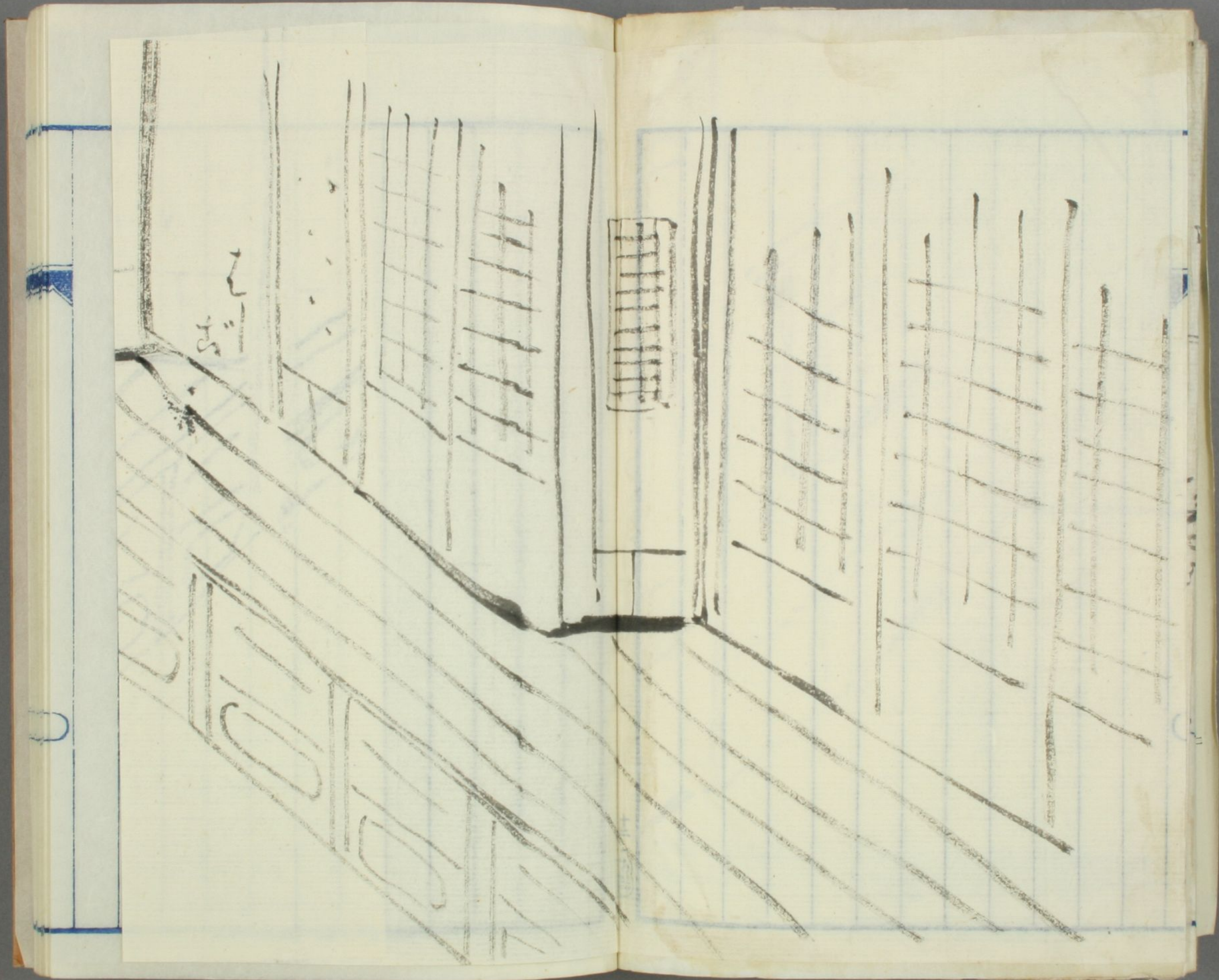
少堂

少

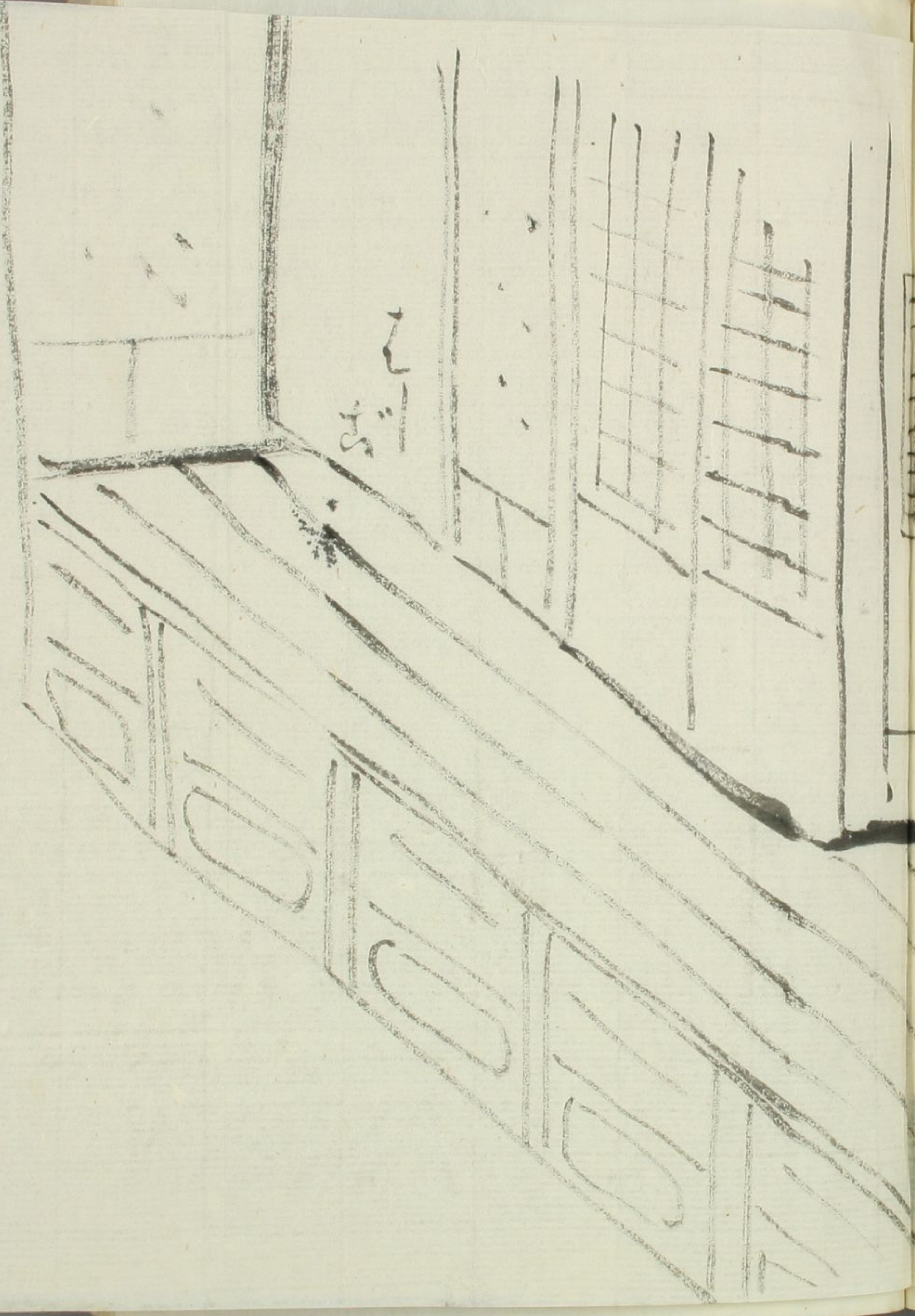
少堂





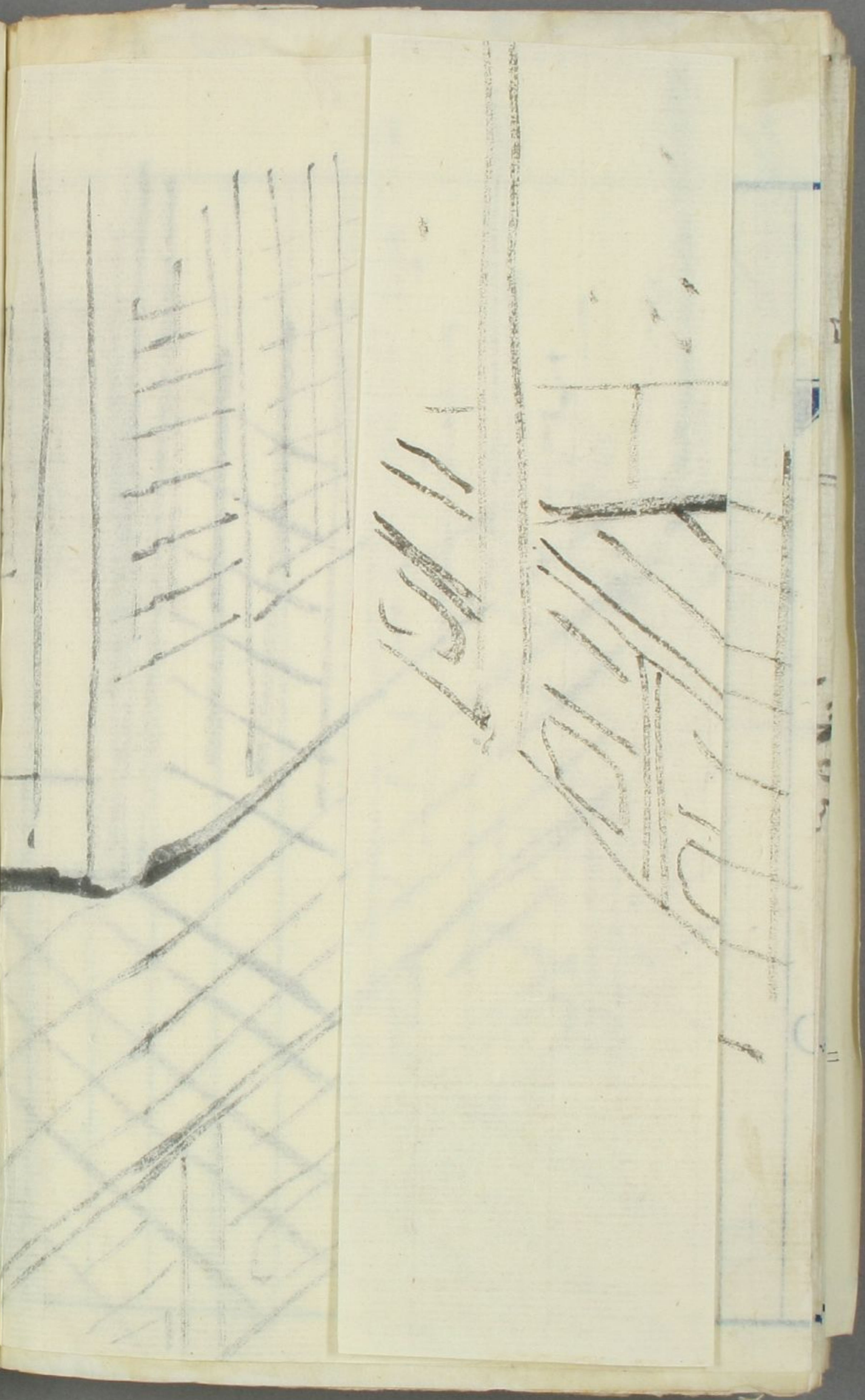
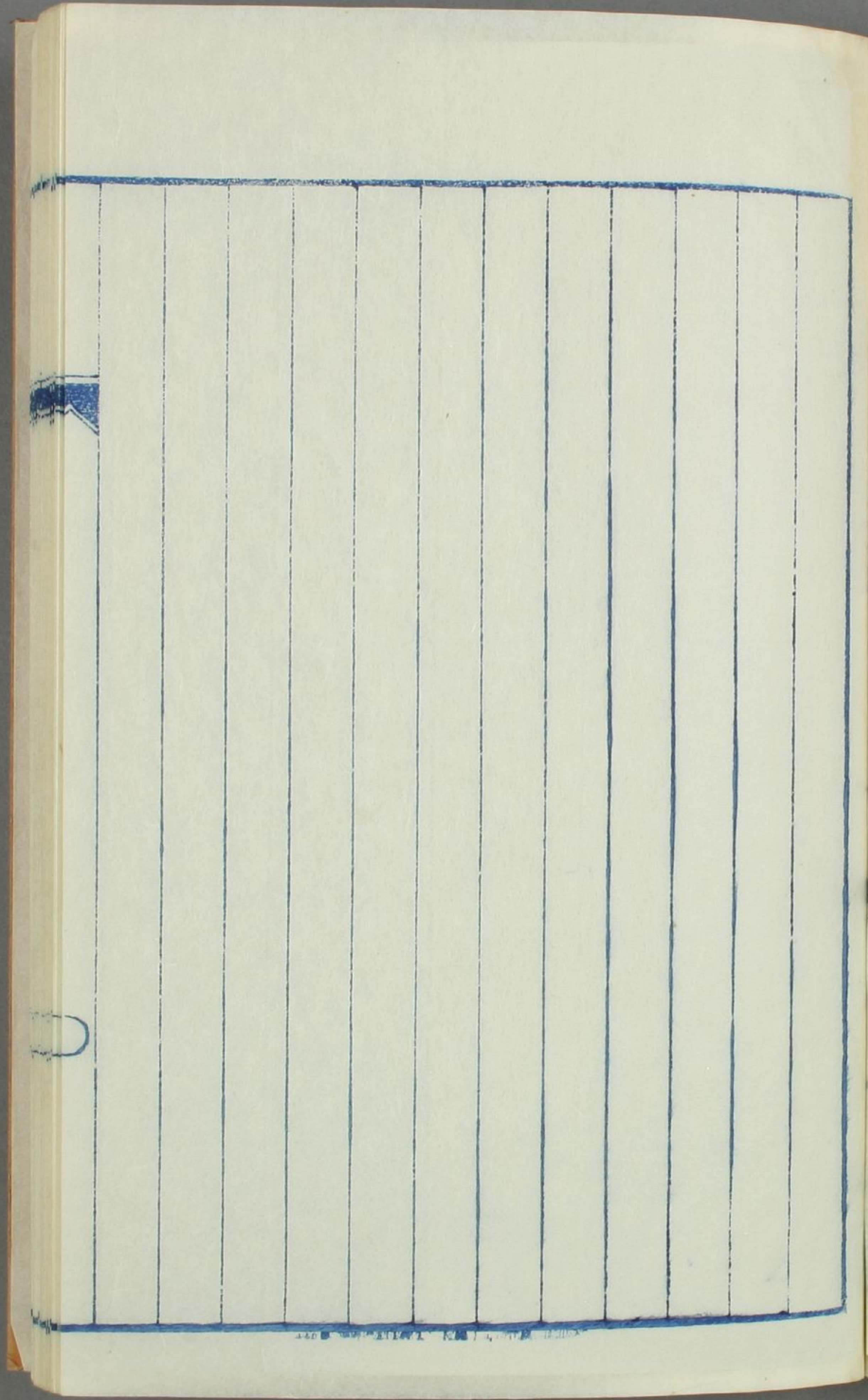


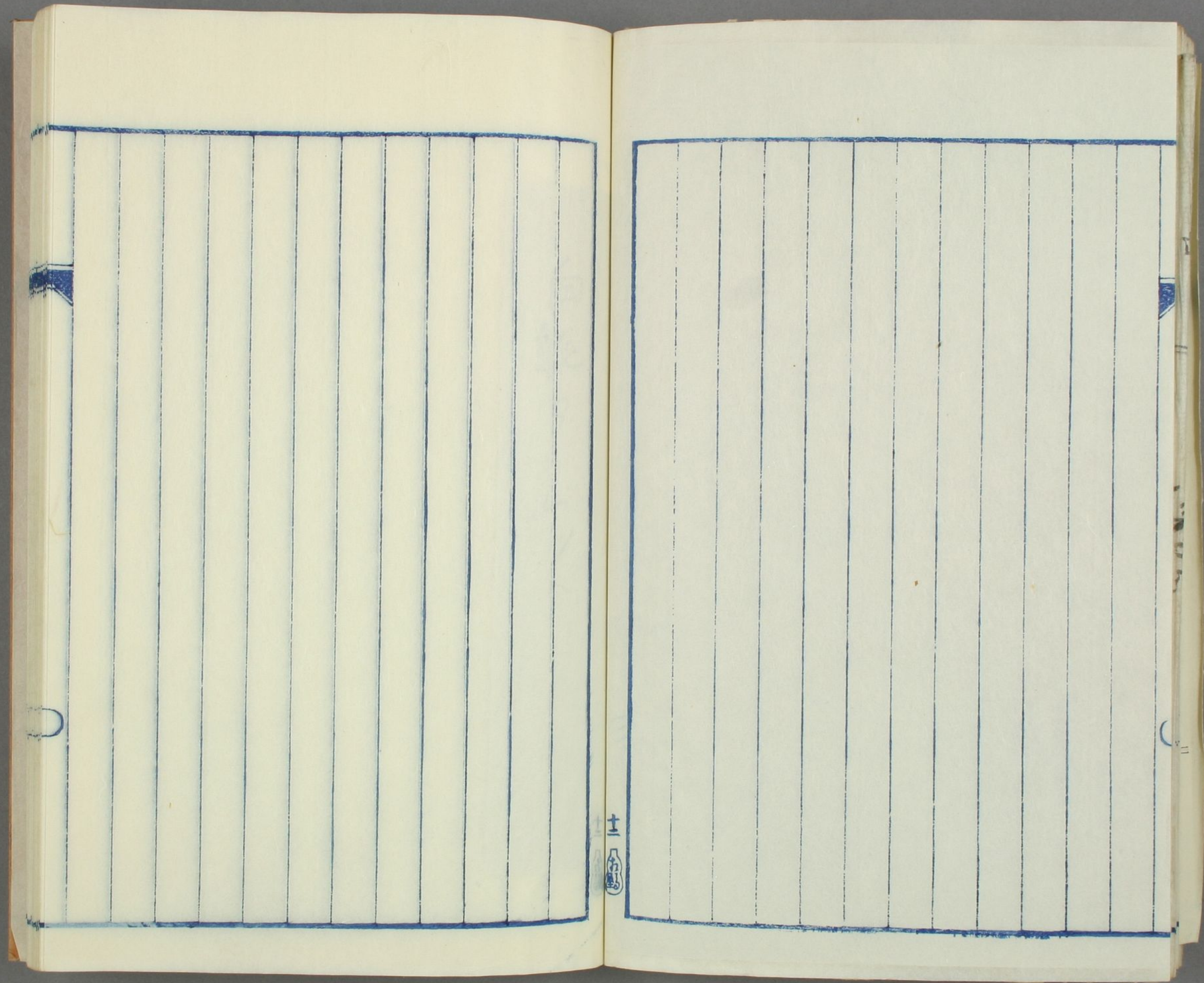
1511



1511







十一  
11

以下全て  
白紙

